歩いて暮らせる
まちなかシンポジウム

多極型コンパクトシティと鳥取都市圏

藤　井　　正
（鳥取大学地域学部）

2013年10月17日　鳥取市

1．都市圏の構造とコンパクトシティ

- 都市圏は、中心都市からの人口や都市機能の郊外化やモビリティ増大によって、基本的に**単核の求心的構造**として都市空間を把握するものとして設定された。
- しかし、中心市街地に関わらない生活行動などの展開により、**多核的な地域構造**として従来の都市圏を考えることが必要となった（都市圏多核化研究）。
- 今後の都市空間の将来像を議論の盛んなコンパクトシティとして検討するに際しても、以下にみるように多核的な都市圏構造を基本的な地域構造として想定しなければならない。

2. コンパクトなまちづくり

＜背　景＞

- 環境負荷の軽減
- 人口減少（市街地拡大時代の終焉）
- 厳しい財政状況

＜効　果＞

a）自動車以外の移動手段（選択肢）の確保
b）拡散的市街化の抑制
c）インフラの効率的利用
d）個性的なまちづくりの基盤
　（歴史・文化・コミュニティをいかす）
e）人口・機能の集積によるビジネスチャンス

(1) 単核型コンパクトシティ：その問題点

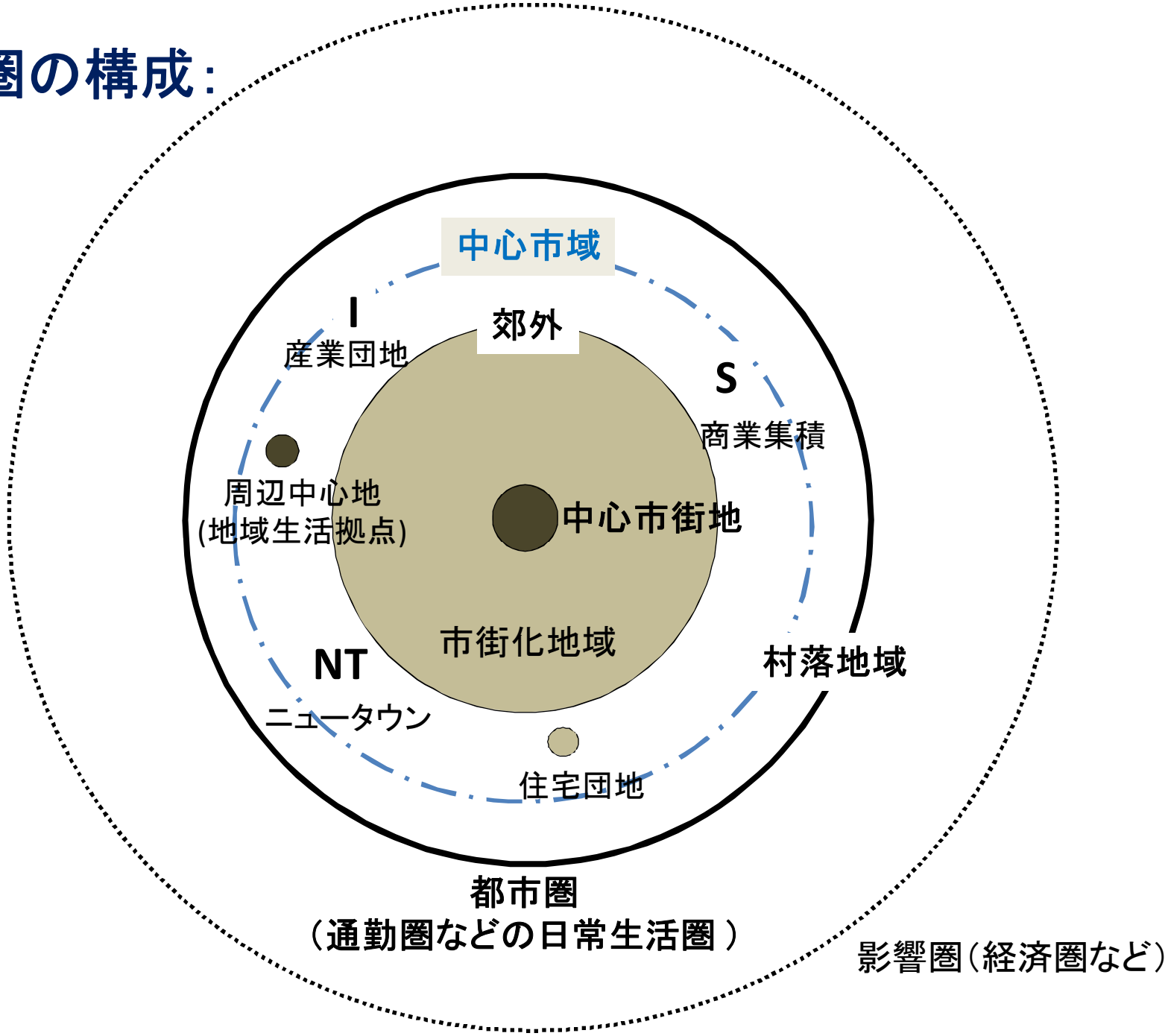
- コンパクトシティ内の移動手段
- 生活行動の広域化
  → 周辺地域を含む都市圏という枠組みの必然性
- 周辺地域の位置づけ（中心市街地への集中投資？）

↓

中心市街地だけ切り取って考えることはできない。
→ **面の視点・点の視点間の移動・関連性把握の必要性**

都市圏の構成：
中心市街地・市街化地域・郊外・周辺中心地・村落地域

都市圏の構成：


中心市域
I
産業団地
郊外
S
商業集積
周辺中心地
(地域生活拠点)
中心市街地
市街化地域
NT
ニュータウン
村落地域
住宅団地
都市圏
（通勤圏などの日常生活圏 ）
影響圏（経済圏など）

(2) 多極型コンパクトシティ

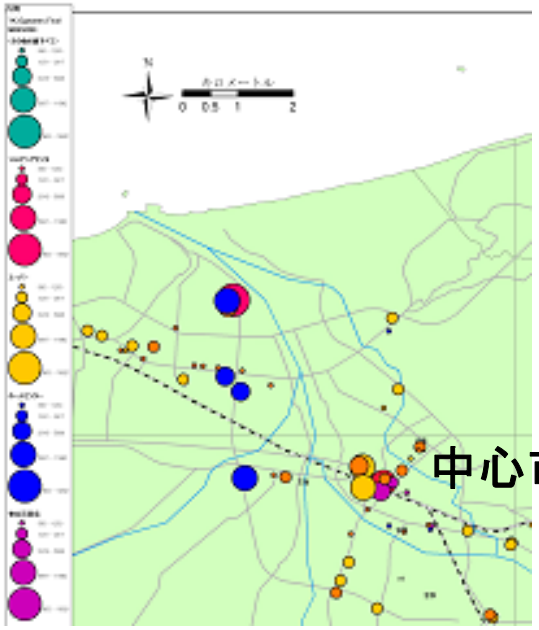
富山市におけるコンパクトな
まちづくりの構想

- 都市圏としての空間基盤の構築
- 生活基盤:
  周辺中心地と公共交通の
  ネットワークの維持(富山市)
- 地域づくり:
  個性的な地域づくりの都市圏内での
  展開・ネットワーク化

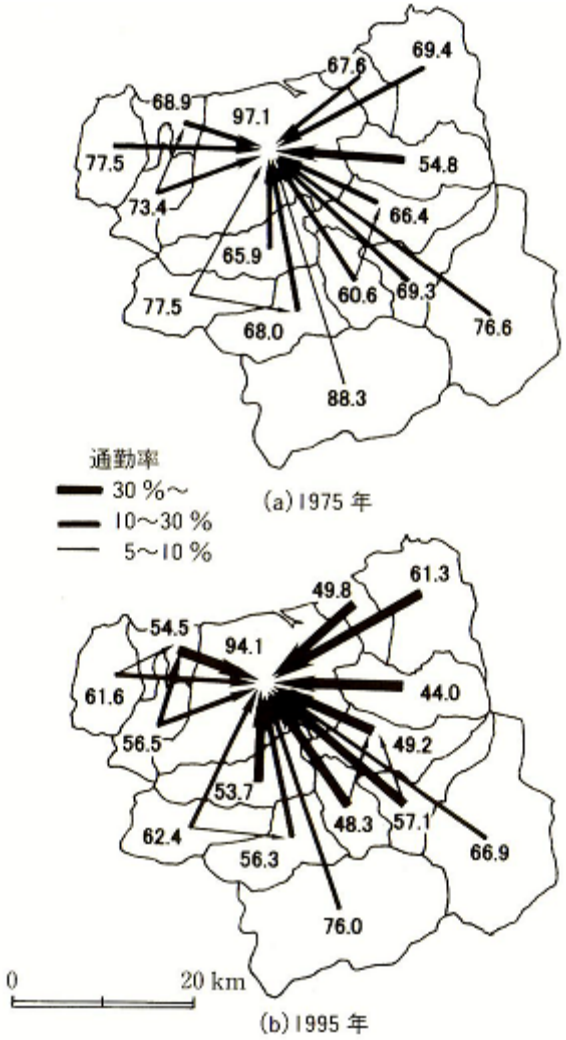
3. 鳥取都市圏の状況

(1) 都市圏の現状

- 通勤流動の広域化（右図）
- 大型店の立地（下図）



大型店の立地
（横山篤史・卒論，2006）



鳥取都市圏における通勤の変化
（山下博樹，2005）

職場(従業地)の分布

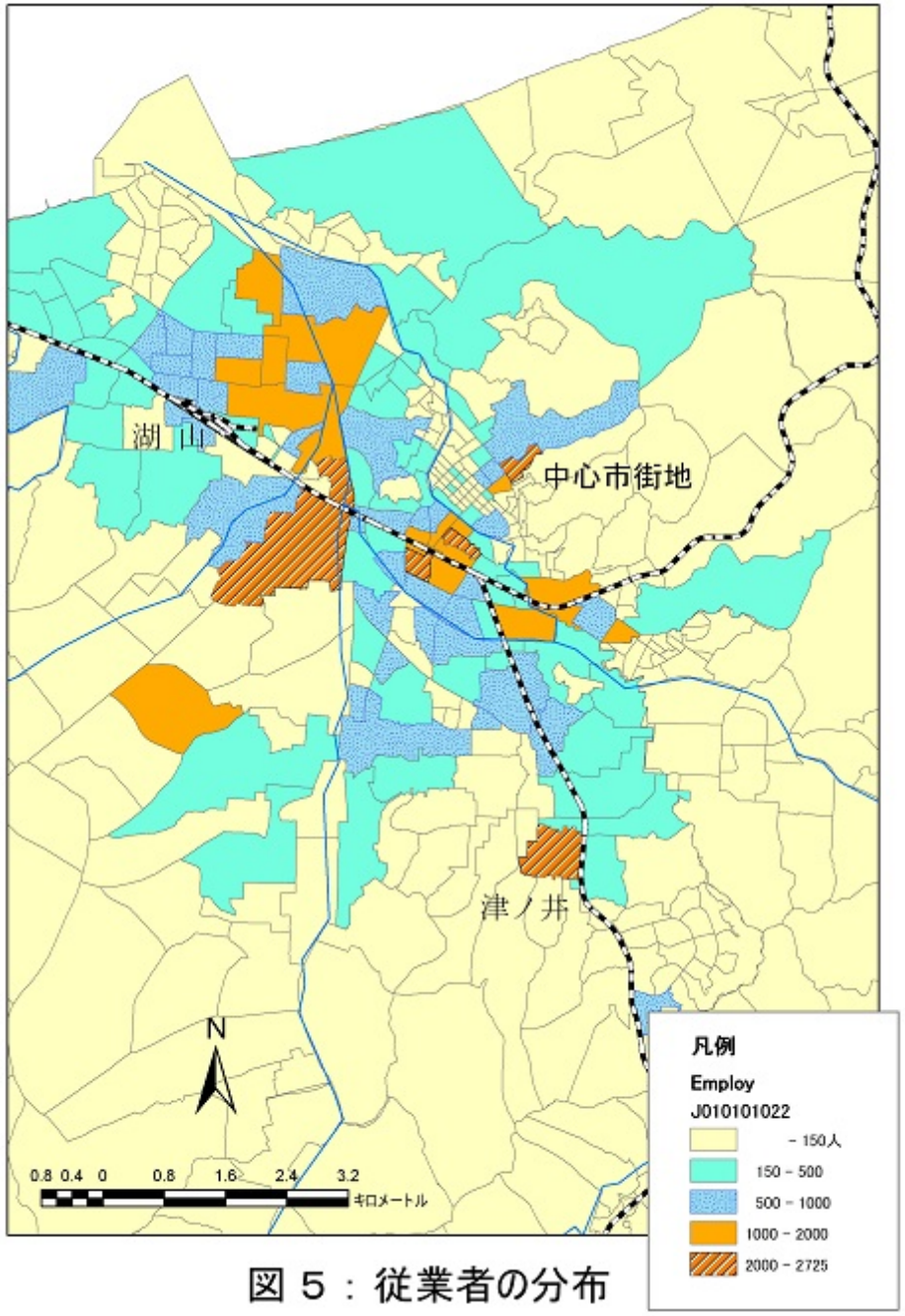


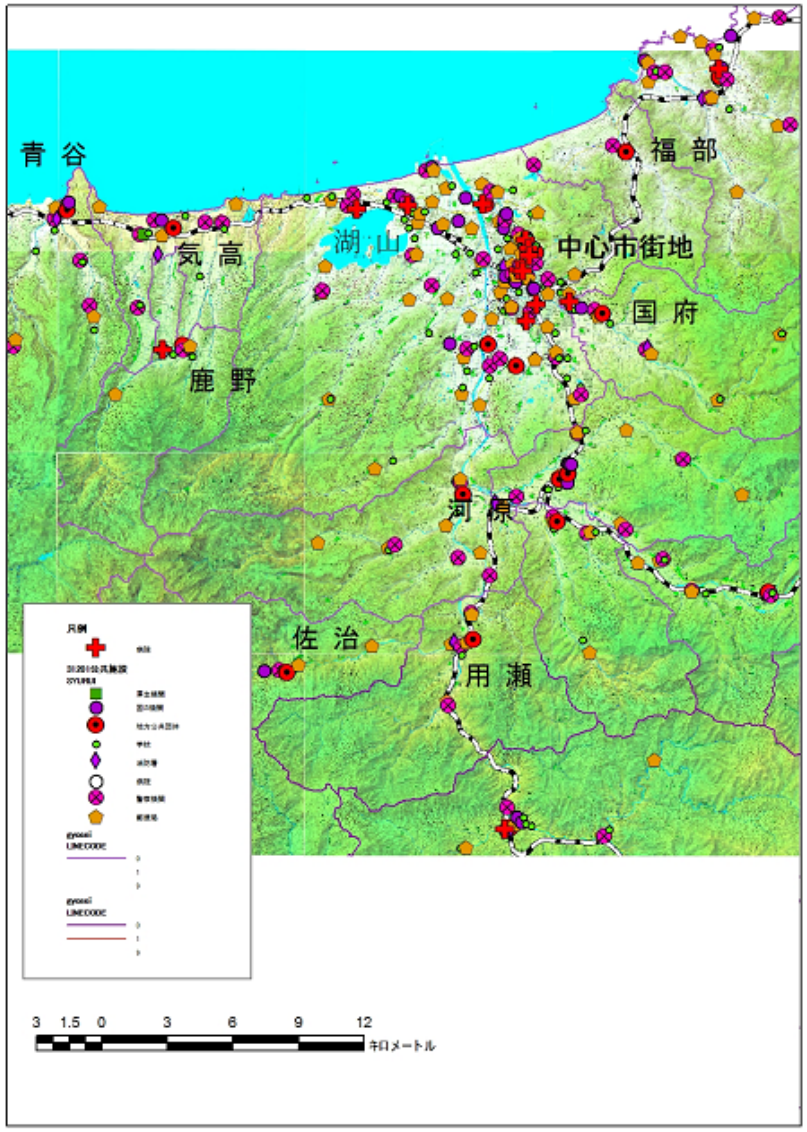
図５：従業者の分布

(2) 周辺中心地の状況

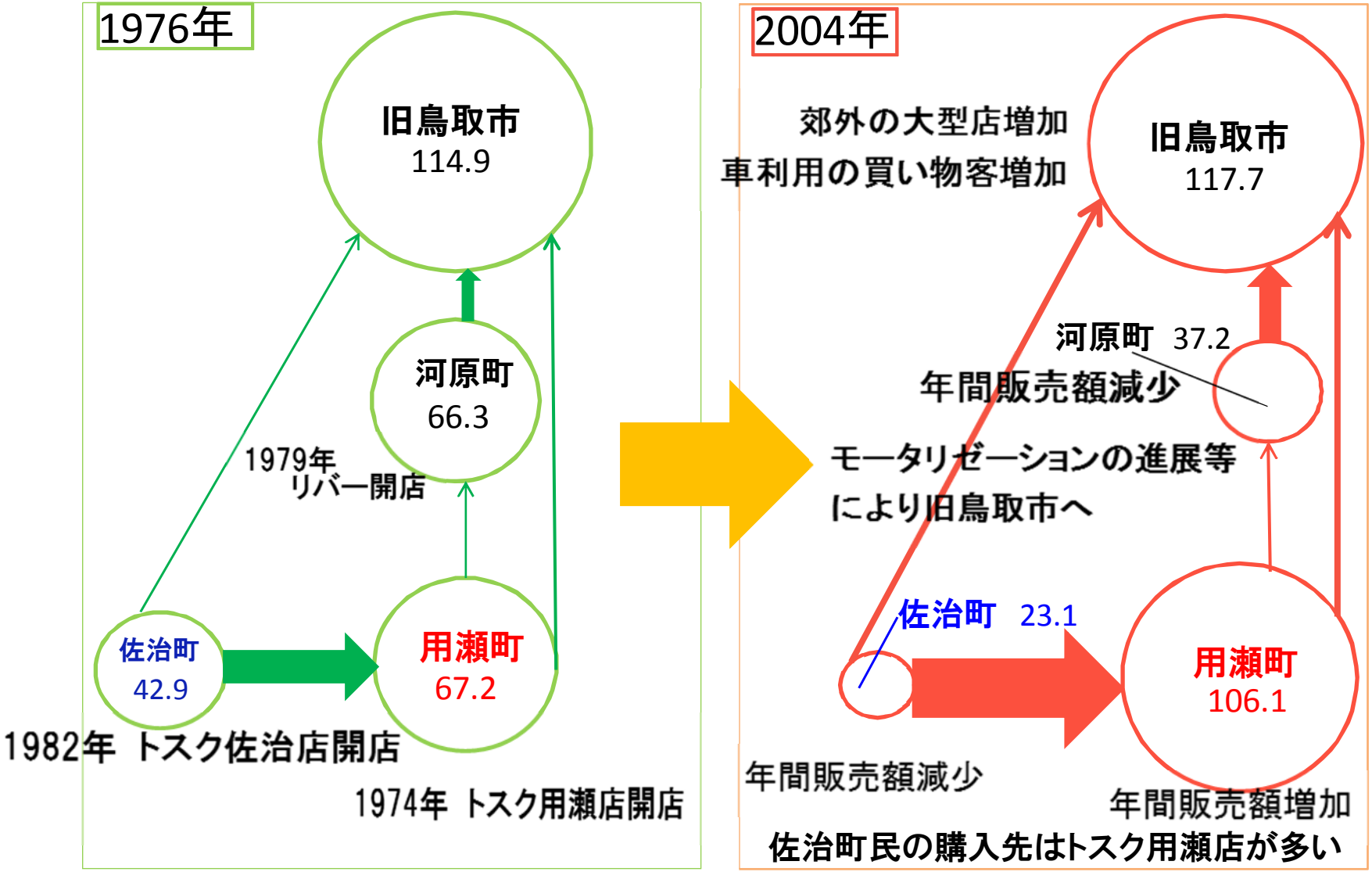
□ 公共施設の立地（右図）

・2004年11月の周辺8町村の合併で鳥取市の面積は、237㎢から766㎢となった。

・国土形成計画では、都市圏を中心都市まで1時間圏で人口30万人。全国で82の都市圏が基本的な生活圏とされている。



生活行動の変化:飲食料品の購入先

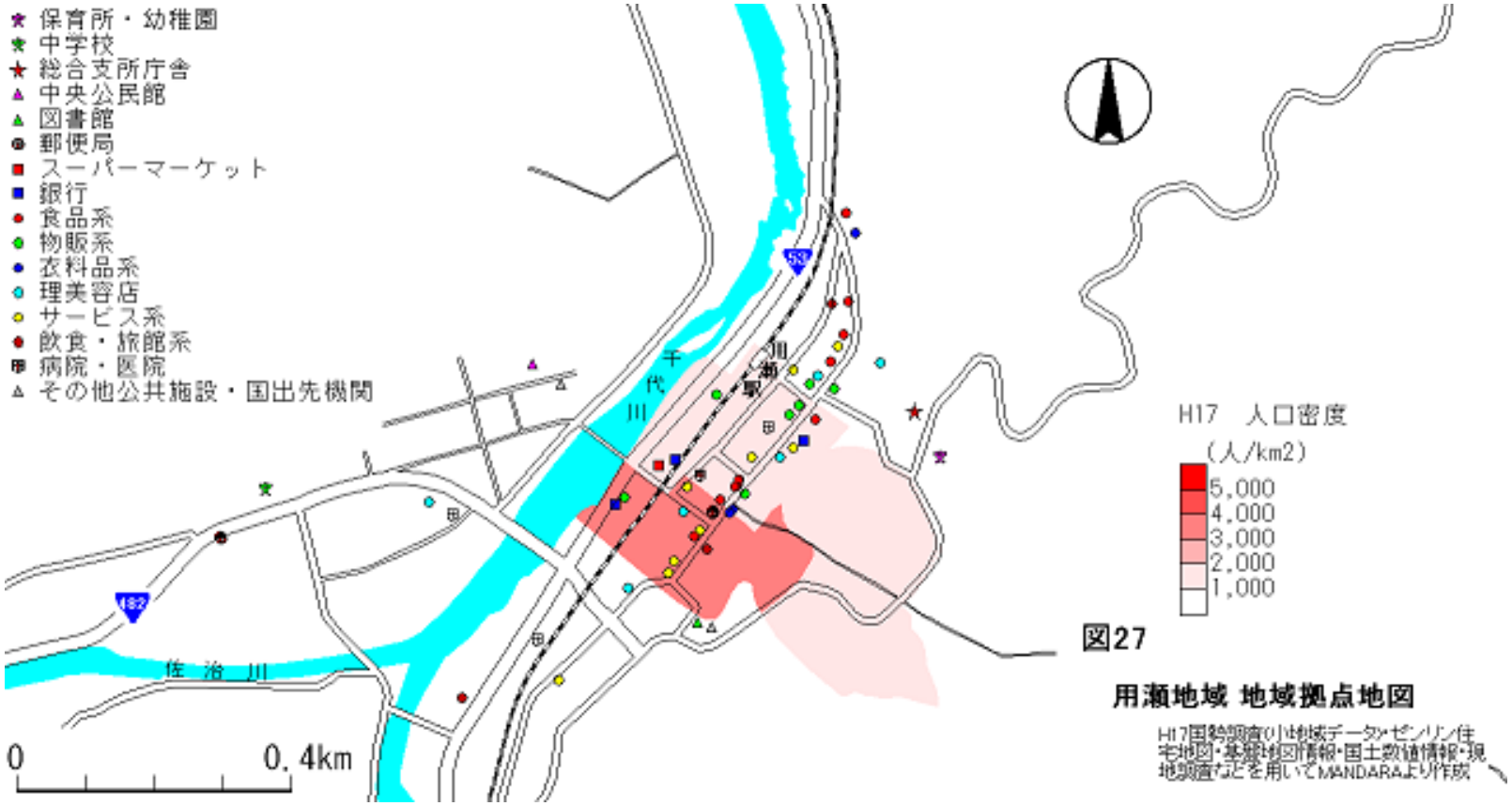


※上記の各地域の数値(鳥取県を100とした時の指数)の計算式

＝各地域の人口1人あたりの飲食料品小売業年間販売額 / 鳥取県の人口1人あたりの飲食料品小売業年間販売額

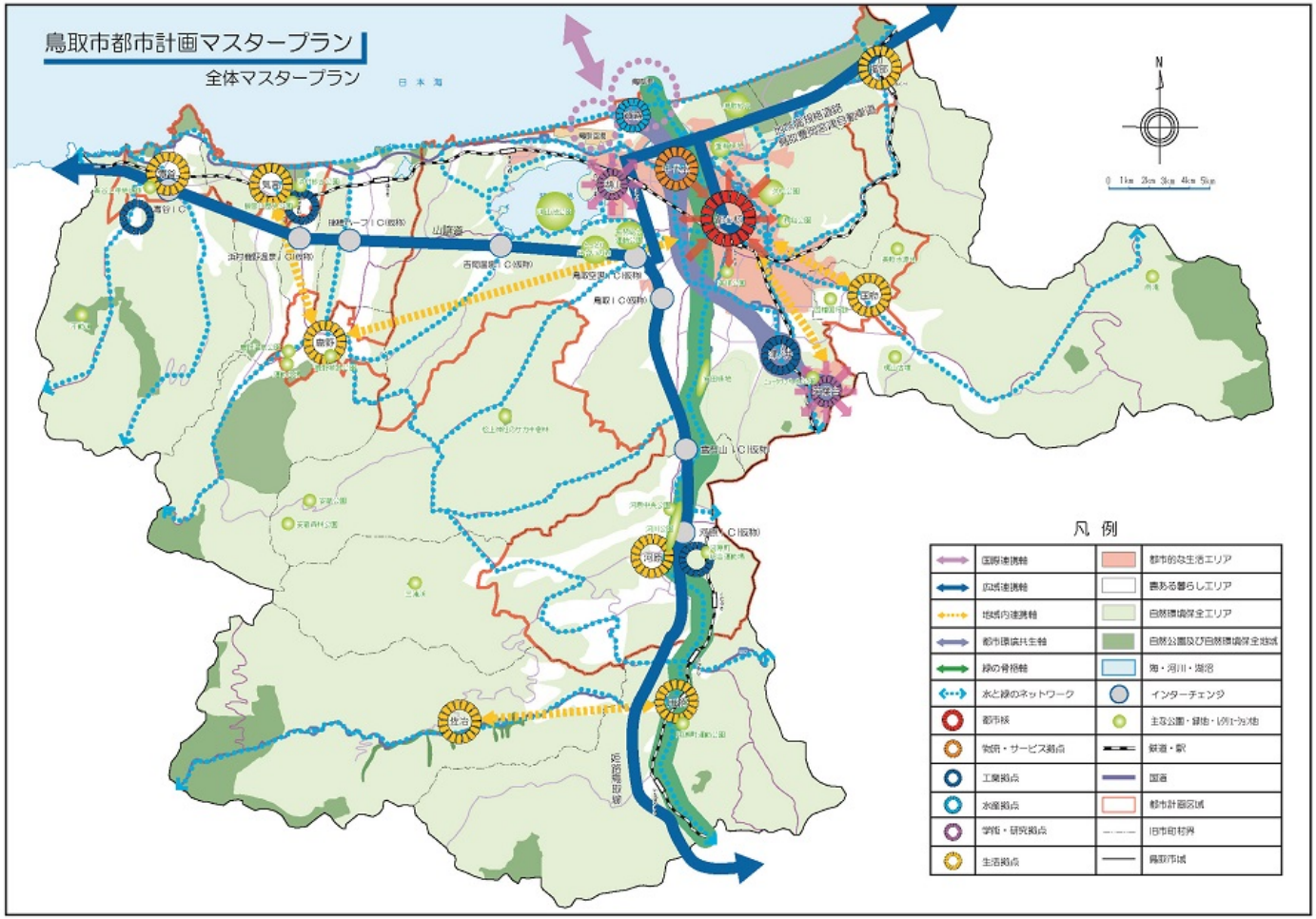
2012年度 地域政策学科地域調査自習生活行動G報告
（資料:『商業統計表』,『全国市町村要覧』,『民力』）

鳥取市用瀬の中心地



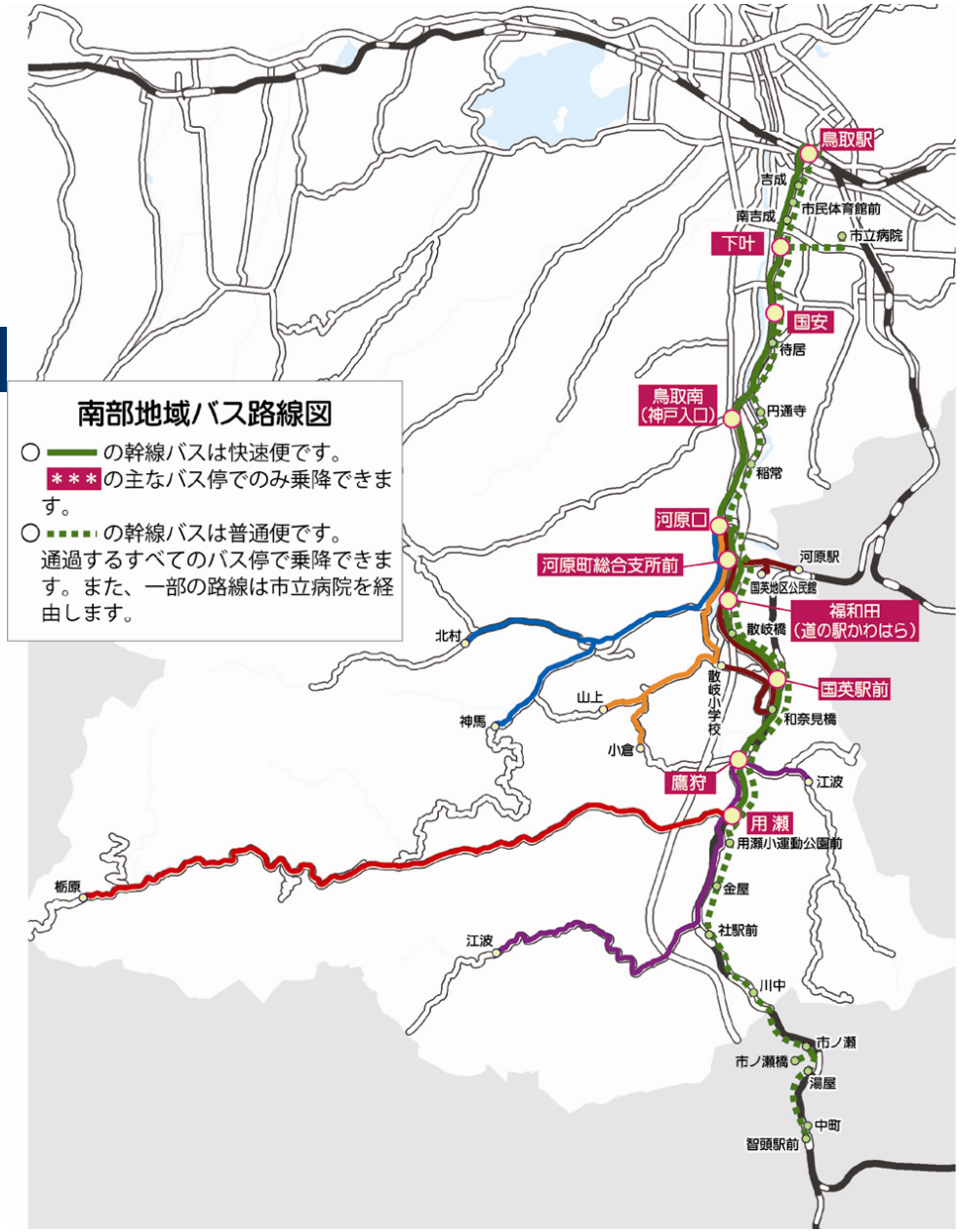
（山本智哉・卒論，2009）

3. 鳥取市の多極型コンパクトシティ整備



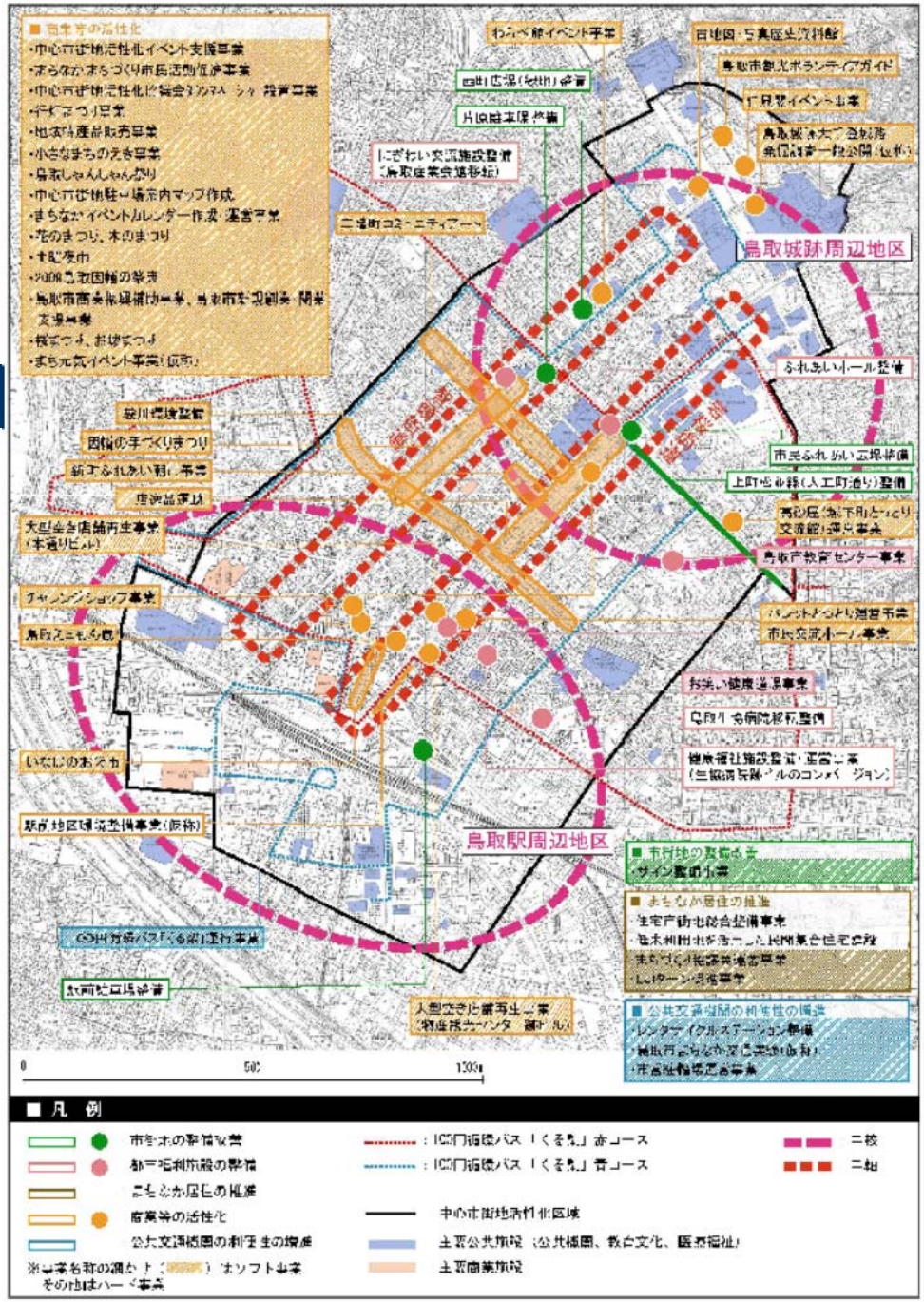
バス路線の再編（鳥取市南部）

幹線と支線等による利便性改善を目指す



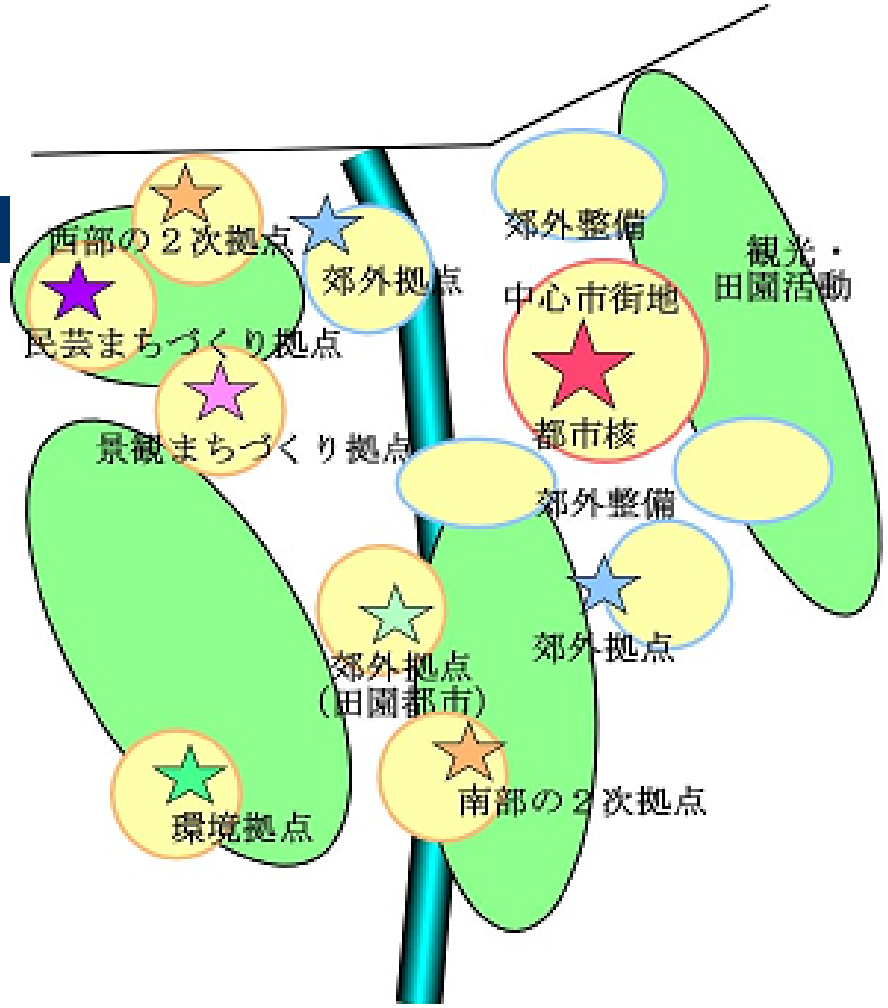
鳥取市中心市街地活性化基本計画

2核（鳥取城跡地区
　　・駅周辺地区）
2軸（若狭街道
　　・智頭街道）の構造



多核的な機能分担

☆ 生活基盤の維持と
個性的な地域づくりが
結合した地域構造



鳥取市における多核的機能分担構想
（藤井　正・山下博樹：鳥取市受託研究，2006）

海外の事例

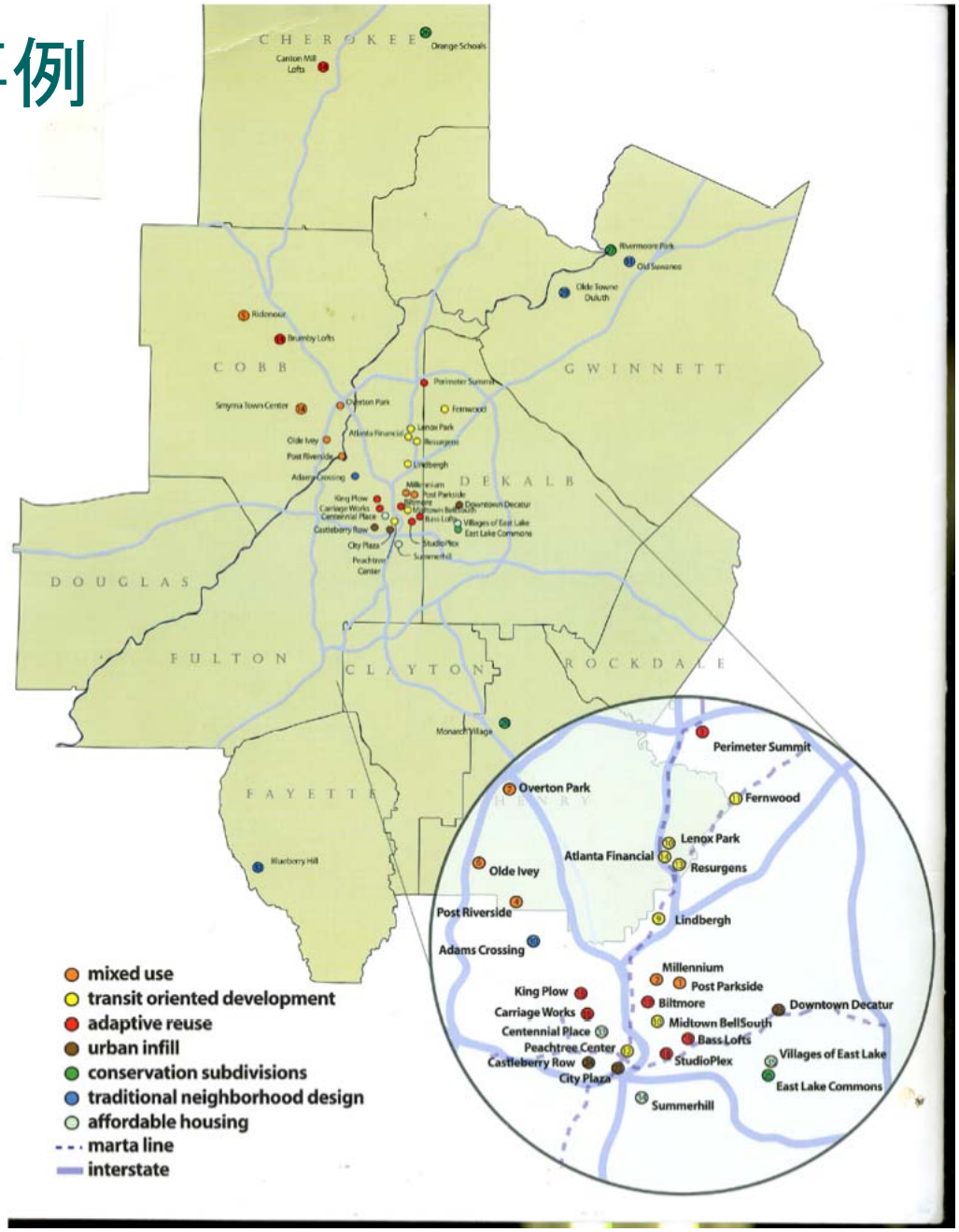
アメリカ合衆国

・アトランタ都市圏の

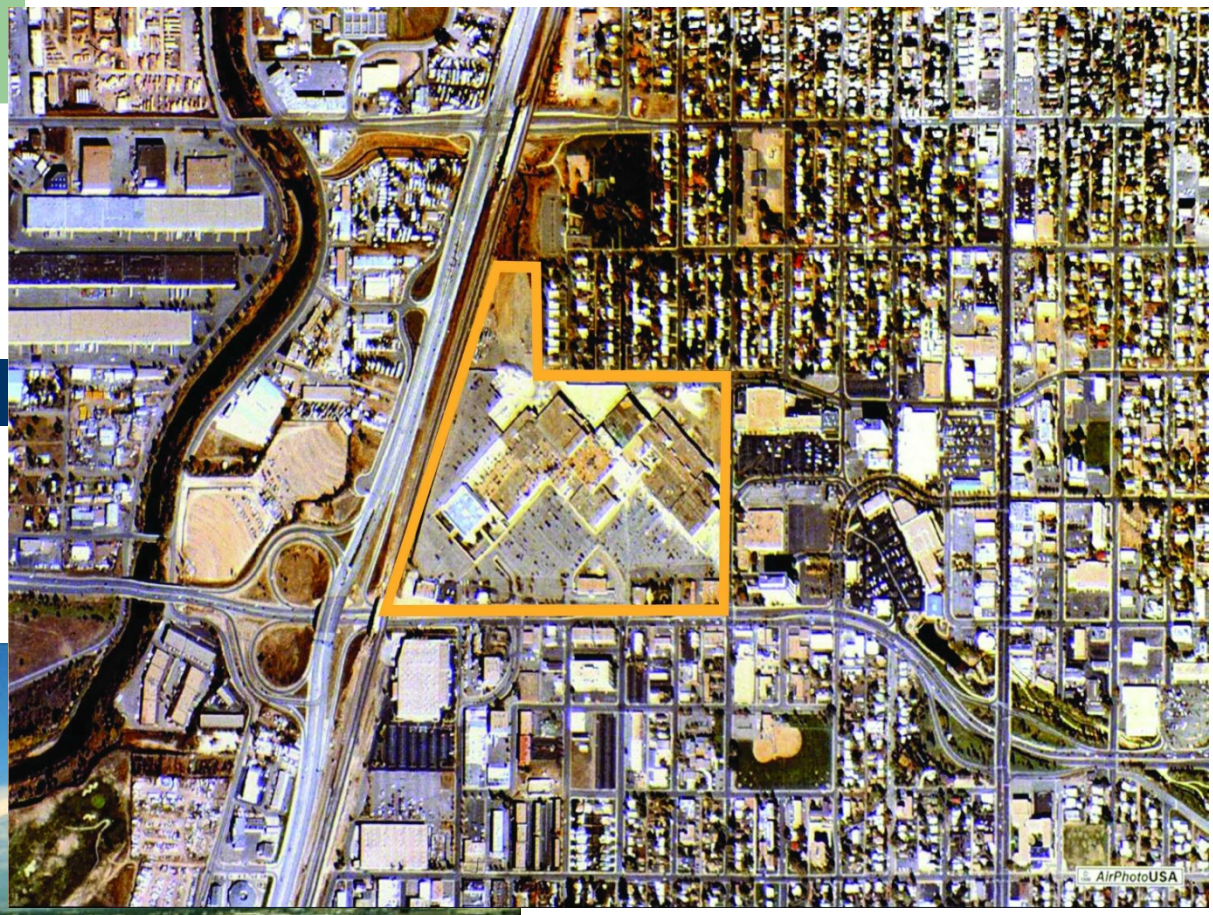
Smart Growth 政策

Smart Growth の事例

- mixed use
- transit oriented development
- adaptive reuse
- urban infill
- conservation subdivisions
- traditional neighborhood design
- affordable housing



デンバーの
郊外中心地整備



ENGLEWOOD

まとめ

- 豊かな生活、安心で暮らしやすい町には、多様な選択肢・ライフスタイルの確保が必要
- 鳥取を魅力ある町として発展させるには、中心市街地・地域生活拠点・周辺地域、それぞれの個性をいかしたまちづくりの展開とそれらのネットワーク化をすすめなければならない。
- その基盤となる都市圏の構造が、多極型のコンパクトシティ